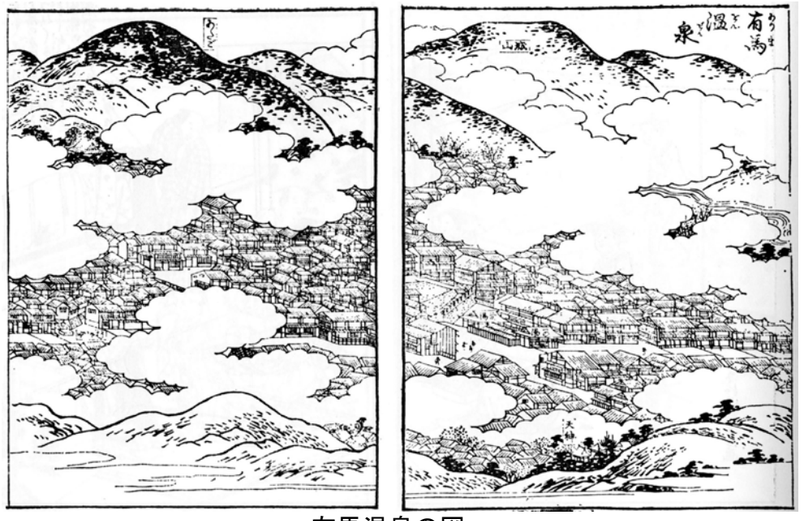
SHIRO 城 踏 FUMI

姫路市立城郭研究室ニュース「城踏」No.96　　2017年６月１日
編集・発行；姫路市立城郭研究室
〒670-0012　姫路市本町68-258 日本城郭研究ｾﾝﾀｰ内
TEL 079-289-4877　FAX 079-289-4890
URL http://www.city.himeji.lg.jp/jyokakuken/

殿様のバカンス

－名湯・有馬を大満喫－

安永６年（1777）後半、江戸に在府していた姫路藩主酒井忠以は、姫路への帰城はおろか、江戸城に出仕することも叶わず、江戸の上屋敷で寝込んでいました。当時23才の若き忠以を襲ったのは「痔疾」です。忠以はその生涯に渡って痔疾に悩まされており、冷えを防ぐべく江戸城登城時の足袋の着用を幾度となく願い出たり、ときには出先で「**持病之痔疾さし起、下血ゐたし**」たため、帰宅するというトラブルにも見舞われたりしています（安永５年12月5日）。この痔疾の治療のためでしょうか、安永６年12月に姫路に帰城した忠以は、有馬温泉（神戸市北区）での湯治に出立しています。この忠以の有馬湯治は、現代の我々のイメージする「湯治」とはだいぶかけ離れています。日記を紐解きながら、詳しく見ていきましょう。



有馬温泉の図

安永7年3月12日に有馬に到着した忠以は、有馬の「岸下屋」という旅館に宿泊します。この岸下屋は忠以以外の大名も宿泊したという記録も残されていることから、格の高い旅館であったと推測されます。さて、13日、忠以は初めて有馬温泉に入湯します。この時代の有馬は、現在と違って内湯はありません。南北に７間（約13m）、東西に３間（約5.4m）ほどの建物の中に、外湯があるのみでした。この建物と浴槽を2つに分けた内、南側を一の湯、北側部分を二の湯としていたようです。忠以は二の湯に入浴していますが、この二の湯の浴槽は一辺１丈（約3.3m）で正方形の形をしており、深さは３尺7、8寸（約95cm）であったと伝えられています。残念ながら、現在の有馬にはこの岸下屋・二の湯ともに現存はしていません。

忠以は、13日にはじめて入湯します。そして香、将棋・碁、茶の湯を楽しみました。14日は午前中に入湯して香、将棋・碁、茶の湯。昼過ぎに外出して鳥の地獄・鼓が滝・有明桜を見物。そのまま「清水の茶屋」に行き、酒宴をしています。15日は朝入湯して帰り道に有馬の町を見物。薄茶を立てた後、また外出して亀の尾滝を見物。そこから顕楽亭で酒宴を催します。酒宴後、再度入湯、夜は将棋・碁を楽しんでいます。

このように有馬での忠以は、朝と夜の入湯、夜の入湯前の酒宴、趣味・遊興を楽しむなど、のんびりとした時間をすごしていることがわかります。なお、夜の入浴前の酒宴は、有馬滞在中ほぼ毎日催されています。現在の感覚からすれば、「病の治療に来たのに宴会続きなんて・・・」と思いますが、江戸時代の湯治での遊興や酒宴は、旅鬱をはらすために有効な療養行為としてみなされていたようです。江戸時代の観光ガイドブックである『摂津名所図会』にも、湯治客の酒宴の様子が描かれています。そして、この酒宴につきものなのが、図にも描かれている有馬の湯女（ゆな）です。湯女は入湯客の世話や浴場の差配をするのが仕事ですが、酒宴に呼ばれれば、有馬唄や三味線などの芸も披露しました。忠以が有馬滞在中に詠んだ歌や俳句の中にも、湯女との関わりの中で生み出されたものがあります。

有馬山湯女の笹原風吹は湯てそよ人をさそいあはする　（湯女に世話をうける人を見て）
秋はさぞ落ち葉の山の桜さへ　（竹という湯女から落葉山の桜をもらったことを受けて）

酒宴の様子

有馬の忠以のもとには、姫路藩の大庄屋を始め多くの人が挨拶にやってきました。このうち、とくに興味深い人物が伊丹町人の小西新右衛門です。忠以は、３月15日に小西新右衛門が有馬に到着した際、肴・菓子・（酒）樽を送り、翌日面会します。19日に暇乞いにきた際には花籠牡丹の印籠をやり、料理を出すなどの気遣いをみせており、他の来客とは明らかに異なる対応をしています。実はこの小西新右衛門は、現在の「小西酒造」につながる伊丹の酒造家で、大名貸しを営む人物でした。小西新右衛門は、姫路藩にとって主要な銀主の一人であり、当時も約600貫の金銭を借り入れています。忠以の小西新右衛門の厚遇には、このような姫路藩の厳しい財政状況を見て取ることができるといえます。

有馬で入湯すること36回。湯治を無事終えた忠以は、４月５日有馬を出立します。道中、千年家（箱木家住宅）、布引の滝、生田神社、楠木正成の墓などの名所を見つつ、兵庫に到着。摩耶山中では、自分の足で歩いて名所を見て回り、布引の滝のふもとでは芝居を見、滝の絵も描いています。翌日は高砂に宿泊して、７日に帰城しました。いずれにせよ、忠以は姫路への帰路も十分に満喫したようです。

最後に、有馬湯治を終えた忠以について。玄武日記を読み進めると、有馬湯治以後の忠以は、それまでと打って変わって痔疾や病に悩まされることが少なくなったことがわかります。江戸に参府した忠以は、老中への挨拶廻りを足繁く行い、俳句、茶の湯を通じた諸大名との交流も積極的に図ります。その成果もあってか、安永９年には天皇即位の使者に任命されるなど出世も重ねています（ちなみに、時の老中はあの田沼意次。この時代は、老中への挨拶廻りを欠かさないことが出世の条件でした）。

厳しい財政状況の中実施された有馬湯治ですが、その効果は十分なものだったようです。　〈M〉

〔図出典：『日本名所図風俗図絵10』角川書店、1980年〕